

令和4年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その1

「評価」及び「総合評価」の評定基準
 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成 一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。</p>	<p>総合評価 B</p>	<p>(所見) 希望進路の実現に向け、「農大進路指導計画」に基づき、進路希望調査、資格取得希望調査及び三者面談を実施し、進路希望を把握するとともに、県の農業法人協会と連携した就農相談会やハローワーク研修を実施するなどして進路意識の向上を図った。また、進路未決定の学生に対しては個別面談を実施したり、徳島公共職業安定所(駅のハローワーク)等と連携し就職相談を実施した。卒業時点での進路決定率は86.8%であった。 四年制大学への編入については、今年度は希望者がいなかった。しかし、1年次生には編入学希望者が数名いるため、複数の教員で役割分担を行い、希望大学の学力試験、論文、面接等の個別対策を行う必要がある。 授業に関しては、ICTを活用したわかりやすい授業の実践に努めている。学生1人1台のタブレットを導入し、インターネット環境での視聴授業や授業支援アプリを活用した授業実践に取り組んでいる。 行事等の集団活動に関しては、新型コロナウイルス感染防止対策を講じ、できる限り実施することとし、伝統行事である農大祭、四国農学連スポーツ大会等を実施することができた。また、模擬会社「そらそうじゃ」の校外での販売活動については、「消費者祭り」、「とくしまマルシェ」、「ヴォルティス学園祭」、「きたじまるしえ」に参加し、体験機会を確保することができた。集団活動や校外体験活動は学生の実践的コミュニケーション力を育むとともに、主体的に課題を発見し改善していく問題解決能力の育成に貢献するものであるため、次年度もコロナの状況を見据え、必要な対策を講じてフレキシブルに対応し、学生が成長を実感できるような取り組みにしていく必要がある。 以上の観点から、「多様な進路に応じた人材育成」に係る総合評価をB(概ね達成できた)とした。</p>
--	------------------------------------	---

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題
① キャリアプランニングの育成(将来設計)能力	<p>1 進路希望調査、三者面談、進路相談会等を実施し、1年次生の早いうちから進路選択に係る意識を醸成させ、進路決定を支援する。</p> <p>2 徳島県農業法人協会、公共職業安定所、国際農業交流協会等及び人材育成会社等と連携したキャリア教育を推進する。</p>	<p>進路指導を踏まえた個人面談の年間3回以上の実施や、キャリアプランニングに向けて就職候補先である農業法人等との交流を促すことにより、後期時における進路目標決定者を90%以上にする。</p> <p>農業法人との交流会を各学年1回、公共職業安定所と連携した進路ガイダンスを1年次後期から2年次前期にかけ2回以上、人材育成会社によるキャリア教育を2年次で2回以上実施する。</p>	<p>進路指導を踏まえた個人面談を年間3回(5月・6月・12月)実施した。キャリアプランニングに向けて、就職候補先である農業法人等の交流(農業法人説明会、農業法人バスツアー・進路研修「ようこそ先輩!」)を実施した。 後期時(12月16日時点)の進路目標決定者は、97%であった。具体的な就職希望先または進学希望先の決定者は50%であった。</p> <p>農業法人協会との連携により、1年次後期及び2年次前期に農業生産法人との交流会を開催した。2年次生対象の交流会参加18法人のうち8法人への就職が内定した。 1年次後期と2年次前期に公共職業安定所と連携した就職ガイダンスを実施した。また2年次生には人材育成会社によるキャリア教育の講義を2回実施した。キャリア教育実施後の個別キャリア面談の希望者は3名で1人につき1回30分の面談を3回行った。 キャリア形成に関する学生アンケートでは、「進路選択、進路実現のために役立った」の項目で、肯定的評価が68.4%、2年次生卒業時点での進路決定率が86.8%と、やや低迷した。</p>	<p>B</p> <p>B</p>	<p>個人面談や農業法人との交流・研修会等を充実させ、2年次当初から就職活動に取り組めるように、進路指導に努める。</p> <p>農業生産法人との交流会等のキャリア教育が進路選択や進路実現にとって有意義であることを事前に十分指導する。また、事後指導として個別面談を実施するなどしてキャリア教育が進路選択や進路実現に直結するよう支援する。</p>
学校関係者委員の意見		<p>・キャリアプランニングの項目で、法人へ多く就職しているが、学生評価の68.4%が気になる。 ・就農相談会は農業法人側から見ても、他の法人の労働条件を知ることによって改善へつながっている。今後も続けたい。</p>			

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題	
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1	学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	職員の授業改善に係る肯定的評価を90%以上にする。 講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数を10%未満にする。	職員の授業改善に対する学生の肯定的評価の10項目平均値は95.42%であった。 1, 2年次生とも不認定者が10%を超えたのは3科目。	B	学生の学習に対する興味喚起及び学習意欲の向上。
	2	進学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・化学・生物・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	進学を希望する学生の合格決定率60%以上を目指す。	進学希望の学生には、個別に専門科目の補習や論文作成、口頭試問対策、面接指導を行った。 大学への編入希望者はおらず、専門学校進学を希望した学生が1名いたが、合格しなかった。	C	個別指導開始時期の見直しと、自主的に学習を行う意欲を高める必要がある。
	3	農業法人との交流会、履歴書作成指導等の実施により、早期から就職活動に向けた意欲の醸成を図る。	農業法人との交流会に参加した1年生の概ね2割以上が次のステップであるインターンシップに参加するよう指導する。 1年次の1月には履歴書の書き方に関する指導を開始し、必要に応じてマンツーマンで指導する。	農業会議と連携した「農業法人説明会」を開催し、その後インターンシップに向けた会社訪問を学生の3割が実施した。その内、4名がインターンシップ(体験学習)を開始した。 また、1年次の1月に「ハローワーク研修」を開催し、就職活動の始め方やその留意点(求人票の見方、履歴書の書き方等)について指導を行った。また、平行して進路先に対応したワンツーマン指導を図った。	A	B 学生が自分が希望する職場であるか、法人は求める人材であるかを判断するために、お互いに十分な情報が得られるように説明会・相談会のあり方を更に工夫し、マッチングを図る。
	4	学生のニーズに対応した資格取得特別講座を開催し、資格取得を支援する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、わな猟免許、土壤医検定に係る特別講義を開催する。学生の80%以上が特別講義を受講する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、わな猟免許、土壤医検定に係る特別講義を開催した。 学生の88.6%※が特別講義を受講した。※受講したと認定された者の数。 1年次生の特別講義受講率は、83.3%。2年次生の特別講義受講率は、92.5%。	A	一部の講座では資格合格率が低いため、意欲の醸成や運営手法等を検討する必要がある。
	5	前年度までの受験報告をもとに作成した「就職・大学編入試験受験報告書」や、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」を活用し、各々の進路に合わせて個別の面接指導を行う。後期においては進路未決定者に対して進路面談を実施する。	進路指導に対する学生の肯定的評価を80%以上にする。 年度末の進路決定率を90%以上にする。 2年次生の進路未決定者に対し個別進路面談を進路が決定するまで必要に応じて実施する。	就職試験受験報告書などを活用し、各学生の就職試験前には可能な限り全員に個別指導を行った。 就職・大学編入試験受験報告書等については、肯定的評価が81.6%、補充授業、個別指導については、肯定的評価が85.1%であった。 卒業時点での進路決定率は、86.8%であった。 進路指導については、数値目標を達成しているが、進路決定率については、数値目標を達成しなかった。	B	進路実現の重要性や働くことの意義等について1年次から意識付けする必要がある。
学校関係者委員の意見		・様々な取り組みがされている。職員の「働き方」にも工夫を。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題
③ 高度情報化への対応とコミュニケーション能力並びに問題解決能力の育成	1 現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 タブレットを用いた授業を積極的に行い、活用を促進する。 授業内容及び機械作業等の動画教材を作成し、タブレット等を用いて、予習、復習が行える学習環境を整備する。	学生アンケートで情報活用能力に関する自己評価を実施し、ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生を80%以上にする。 授業においてタブレットを利用する職員を8割以上にする。 動画教材を10個以上作成し、インターネット環境で閲覧できるようにする。	「ワード、エクセル、パワーポイントなどの基本的な使い方を習得できた。」という項目に肯定的な回答をした学生が、1年次生では93.1%、2生では89.5%であった。また、「学習や体験したことを分かりやすくまとめ、パワーポイントなどを用いて説明することができた。」という項目に肯定的な回答をした学生が、1年次生では79.3%、2生では81.6%であった。 授業においてタブレットを利用した職員は75%であった。 動画教材は11個作成し、インターネット環境で閲覧可能となっている。	B	引き続き「ワード、エクセル、パワーポイント」を習得・活用できるよう指導に努める。 タブレットを用いた授業を積極的に行い、日常的な活用を促進する。 授業内容及び機械作業等の動画教材を作成し、タブレット等を用いて、いつでも、予習、復習が行える学習環境を整備する。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	コース内で、プロジェクト学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回以上設定する。 プロジェクト成果発表会で学生の8割以上が職員から70点以上の評価を得る。	プロジェクトの計画発表、中間発表、成果発表の練習も兼ねて、コース内で進捗状況を発表する機会を設け、プレゼンテーション能力の向上に努めた。 成果発表会における職員による評価が70点以上の学生は77.5%であった。農業生産技術コースは78.3%。6次産業ビジネスコースの学生は76.5%であった。	B	プロジェクト学習の計画段階からの指導・助言を充実させる。
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	コース実習の時間のうち、年間20時間以上を、話し合い・討論・発表などの言語活動の時間にあてる。	特に各種発表会の準備の際に発表の仕方や資料の提示方法などの検討を行い、言語活動の充実を図った。また、実習前の予習や復習の充実を図った。 農業生産技術コースでは20時間程度確保した。 6次産業ビジネスコースでは30時間程度確保した。	A	引き続き授業や実習において言語活動を適宜活用し、思考力や判断力の育成に努める。
学校関係者委員の意見		言及なし。			

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題	
④ 体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1	模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」の活動は実習やプロジェクト学習と一体とみなしている。そらそうじゃの業務部ごとに、学生主体の運営を支援する。	「徳島農大そらそうじゃ」の業務担当者会を定期的で開催し、そらそうじゃでの活動に対する学生の肯定的評価を80%以上とする。	1・2年生合同の業務担当者会を年7回実施した。そらそうじゃを通じた商品開発や販売技術向上について、肯定的評価をした職員は92.3%であったが、学生は76.1%と目標を下回った。	B	充実した業務担当者会を開催するとともに、学内外へ積極的に出店し、様々な消費者への販売機会を増やす。
	2	模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」での活動を通して、責任感や協力を重んじる姿勢を、農業大学の文化として定着させる。	学生アンケートを実施し、そらそうじゃでの活動における「責任感」や「協力」等に関する肯定的評価を90%以上にする。	実習やそらそうじゃ等の活動における「責任感」や「協力」について、学生の肯定的評価は91%であった。	A	ヴォルティス学園祭やとくしまマルシェ等の各種イベントに参加し、仲間とともに活動する機会を増やす。
	3	コロナ禍で休んでいた「徳島農大そらそうじゃ」の「きのべ市」を復活させ、地域への定着を図るため、「きのべ市」の再開計画や開市日程、そらそうじゃの活動等について、積極的に広報する。	「徳島農大そらそうじゃ」の活動状況や「きのべ市」の開催案内を広報誌「GoGo農大」、農大ホームページ、SNS、対面を通して情報発信する。	きのべ市にかわり、ロビー販売において、学生による接客・レジ対応を当番制で実施するよう改善した。広報活動については、GOGO農大から発信するとともに、インスタグラムを新設した。	B	学生が主体となり、ロビー市の充実強化を図る。また、学生と共にインスタグラムや新たなSNSツールを検討し情報発信を充実させる。
	4	「農業・6次産業体験学習」を実施し、研修先の支援を得ながら職業体験を通じて実践力と社会性を育成する。	体験学習によって実践力や社会性が向上した学生を90%以上にする。	農業、食品関係の法人、農業士各位の御協力により体験学習が実施できた。農業生産技術コース、6次産業ビジネスコースとも100%の学生が積極的に活動できたと回答した。また、農業生産技術コースでは100%、6次産業ビジネスコースでは94%、両コースでは97%の学生が学びたいことや疑問点を積極的に質問したと回答した。 研修中“礼儀は適切に行えたか”との問には、農業生産技術コース100%、6次産業ビジネスコース94%、両コース平均97%の学生が行えたと回答し、“体験学習を通じて知識や技術面で成長できたか”との問に、農業生産技術コースで100%、6次産業ビジネスコースで94%、両コース平均では学生97%が成長を実感した。	A	引き続き体験学習が就職した際の実践力や社会性につながるよう、学生に対する意識付けを行う。
	5	「農業・6次産業体験学習発表会」を開催し、学生が感じた成果と課題を整理して発表することで、学習内容の強化と定着を図る。	発表会に向けた事前準備の段階の個別指導を充実させ、全員が合格基準を満たす発表ができるようにする。	体験学習の目的、指導を受けたことを改めて振り返り、分かりやすい資料づくり、スライド作成を指導し、9月の発表会では、整理されたものを視覚的に伝えることができたが、ごく一部の学生については再発表となった。 なお、今年度の体験学習は、新型コロナウイルス感染の拡大を受け、当初予定していた第1回目(1月)、第4回目(夏休中)を中止とした。また、6次産業ビジネスコースでは、食品製造事業所の受入れができなくなり、途中で研修先を変更せざるを得ないケースが目立った。	B	体験学習を計画どおり実施すると共に発表内容の取りまとめについて個別に指導助言を行い、発表力(プレゼン力)を育成する。
	6	農業・6次産業巡見等を通じて県内の特徴的な農業や地域社会について知り、郷土愛を育む。	研修の機会を3回以上設ける。	2年生に対して4回、実施した。現地を訪問して生産者から直接指導いただけるので、学生にとって貴重な学習機会となっている。	A	引き続き、充実した内容となるよう工夫しつつ実施する。
学校関係者委員の意見		<ul style="list-style-type: none"> ・コロナで3年間、本来の活動ができなかった中、よくやっていると実感している。世界が変化するなか農業が見直されるだろう。「そらそうじゃ」は社会で勉強することを学校でできる全国初の取組であり、発展させてくれている。(評価が)数値的に低いところもあるが、半分以上が良い評価となっているのは素晴らしいと思う。社会に出たときに生きてくるので頑張ってもらいたい。 ・「そらそうじゃ」の評価で学生の肯定的評価が76.1%ということから辛口のB評価となっているが、コロナ禍でもよくやっていると、A評価でよいと思う。 ・城西高校でも直売所「そよかぜ」を定期的に関市した。固定客が多く、新規の客の確保が難しい。生徒のアイデアでTikTok(ティックトック)で発信したところ総再生回数10万回となった。若い感性を吸収できれば、より効果的な情報発信につながるのではないかな。 				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題	
⑤	<p>特別自主・動自・課外活動の活性化による醸成と仲間づくり</p>	1 学生生活を活力あるものとするためにサークル活動、自治会活動、農学連行事などの自主的運営を支援する。	農大祭においてサークル活動や自治会活動の成果を展示する。 農学連スポーツ大会への全種目参加、ならびに競技の運営協力を通じ、他県の学生と交流を深める。また、令和5年度の本県開催を見越した活動を行う。	農大祭は自治会が主体となって運営し、各学生のプロジェクトやそらそうじゃの紹介パネルを展示した。 農学連スポーツ大会では全種目に参加した。バドミントン競技については準優勝であった。また競技運営協力を通じて交流を深めるとともに令和5年度の本県開催を見越した活動となった。	A	<p>四国農学連行事は本校が事務局となるため、学生が主体性を持って計画的に運営するよう指導する。</p> <p>新型コロナウイルスの情勢が不透明であるが、学生生活を豊かにし仲間づくりの場ともなる農大祭をはじめとする学校行事は、学生の主体性を尊重しつつ開催方法を工夫してできる限り実施する。</p>
		2 学校行事(剣山登山、農大祭、収穫祭、スポーツ大会等)について仲間が共同し企画、運営することを支援し、行事を成功させる。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を80%以上にする。	新型コロナウイルス感染防止対策を図り、自治会主催で農大祭、新入生歓迎ボウリング大会、収穫祭等を実施することができた。 「自治会活動や学校行事は、仲間作りや連帯感を高めるために役立った」と、肯定的な評価をした学生は84.8%であった。	A	
学校関係者委員の意見		・2年間の短い期間で濃密な活動をしている。時代や農業界の変化に対応したカリキュラムで、子供たちが良い経験をしたことを今更ながら知った。コロナで外部との接触が少なかったが、今後は増やしてほしい。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題	
⑥	<p>積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善</p>	1 課長会、コース会等を定期的かつ効率的に実施し、学生指導、コロナ禍における対応をはじめ、危機管理、コンプライアンスなどに関する情報交換や研修を行うことで、教育課題の共通認識、指導情報の共有化、並びに教職員の資質向上を図る。また、コロナ禍等緊急時においてもシラバスに沿った教育を円滑に実施するためにカリキュラムの編成を工夫するとともに、タブレット端末等を学生並びに教職員が有効に活用できるようにスキルアップを図る。	課長会を月1回以上、コース会を月2回程度実施し、学校運営改善や教育指導改善につながる研修(勉強会)を継続的に実施する。 組織アンケートを行い、学生の理解を深める情報交換や組織力等に係る職員の肯定的評価を90%以上にする。 リモート授業や通常授業での試行を行いタブレット端末の円滑な利用を促す。各教員1回以上利用する。	課長会・職員会を開催するにあたり、コース会議や校務担当での事前の協議を密に行い、会議を円滑に行う事ができた。課長会・職員会の開催回数は17回、コース会議および各校務担当会議は適宜開催し、情報共有を行った。 今年度は、昨年度までのコロナ禍の対応を基に、カリキュラムに余裕を持たせ、フレキシブルにスピード感を持ってカリキュラムの再編成等をスムーズに実施。 タブレット端末試行授業を33回実施。タブレット端末を活用したリモート授業のノウハウを修得し、不測の事態への対応力が備わった。 課長会等において、学生の学習や生活の状況について情報を共有する他、学生指導について指導方針を協議しながら共通認識を図った。また、職員による始業前の朝会や、ホワイトボードへの記載等により、1日のスケジュールや学生への指示事項を共有した。 今年度は、「コース内における情報共有」が十分できていると感じる教員の割合は50%となり、肯定的な評価(その通りである、どちらかと言えばその通りである)では、昨年度の100%に対して今年度は91.7%となった。	B	<p>学生の状況や個々の教職員の教育活動についてより共有し、より透明性の高い学校運営に努める。 また、教職員の更なる積極的な情報交換・協議の機会を増やせるようスケジュール管理を行う。 不測の状況にも対応できるようBCP(事業継続計画)を構築していく必要がある。</p> <p>引き続き、学校評価結果を活かした目標を設定し共有することにより、職員間の相互協力体制を強化すると共に、意欲を持って学校運営に参画できる雰囲気をつくる。</p> <p>共有フォルダを活用した情報共有体制を更に検索しやすい体制を検討していく。</p> <p>今後も、高等学校との連絡・連携を更に密にし、学生指導に関する情報交換を行う。</p>
		2 定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のモニタリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	指導の進捗状況を適切に評価するため、校務分掌やコースの業務に関するモニタリングを年2回実施すると共に、外部評価も行う。	教員対象学校評価アンケートの、課長会での積極的な情報発信や教育活動及び学校運営上の諸問題への取組みに関する項目では84.9%の肯定的回答が得られ、改善に努力していることが示された。また、外部評価委員会において、労働力不足に対応した教育活動としてカリキュラムにスマート農業、ICTを活用した農業についての学習を取り入れたことは高く評価された。	A	
		3 個人情報に十分配慮し、共有フォルダを活用した情報共有体制を構築していく。また、より検索し易いフォルダの体系を構築する。	個人情報管理の適正化と必要なファイルの検索性向上のために、ネットワークサーバーのフォルダ構成を再構築する。構築するにあたり、検討会を年3回程度行う。	農業大学校職員共有のネットワークサーバーを整備し、個人情報管理の適正化とファイルの検索性向上のために、校務担当ごとにネットワークサーバーのフォルダ構成の構築を行った。また、同時にネットワークサーバーのフォルダとリンクした共有書庫を整備し、個人情報に配慮しつつ情報共有体制を構築した。	B	
		4 高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	年2回の高校訪問や電話連絡を通して、学生指導に関する情報交換を行う。	今年度は年1回から2回の高校訪問を実施し、学生に関する情報交換を行った。また、新型コロナウイルス感染防止対策を徹底してオープンキャンパスを2回開催するとともに、希望者に対して個別対応も行った。	A	
学校関係者委員の意見		・3年間のコロナで授業も大変だったと思う。コロナ前後で工夫したことなどを教えてもらいたい。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題
⑦ 心の通う人間関係を構築する能力の素地養成	1 教職員の人権意識を啓発するために人権研修を行う。また、いじめなどの問題を早期発見するための研修を行い対応能力を高める。	学校評価アンケートにおいて、授業、実習や行事を通じて、学生の人権意識を高めるよう配慮したと回答する教職員が90%以上とする。	92.9%の教職員が、左記のとおり回答した。	A	引き続き、職員に対する研修を実施する。
	2 学校生活において、問題がある学生には面談し、心理的な問題等を早期に発見し、組織的に対応する。	学校評価アンケートにおいて、人権を尊重する仲間づくりができたと回答する学生が80%以上とする。	人権を尊重した仲間づくりについて、肯定的回答をした学生は92.5%であった。	A	日頃から学生の様子を観察し、必要に応じて個別面談等を実施するなどして、人権尊重の意識付けを行う。
	3 学生の悩みを解決するために、学生、保護者、教職員による三者面談を開催する。学校と家庭が連携し、協働する体制を構築し問題解決にあたる。 また、スクールカウンセラーを配置し、カウンセリングを受けられる体制を整備する。	年1回の三者面談に加え、学校生活に関する調査を年2回実施し、いじめをはじめとする学生生活上の問題を早期発見するとともに、必要と思われる学生全員に教育相談を実施し、問題解決を図る。 スクールカウンセラーを令和4年6月から令和5年2月までの間、配置するとともに、スクールカウンセリングに関する教職員研修を2回以上実施する。	三者面談を1年次生は2回、2年次生は1回実施した。 また、学校生活に関するアンケート調査を2回実施し、要注意回答をした学生に対しては、個別面談を実施した。 スクールカウンセラーを令和4年6月から令和5年2月までの間に8日間(1日4時間)配置し、10名の学生が、のべ36回のカウンセリングを受けた。また、悩みを抱える学生対応についての職員研修を2回実施した。	A	引き続き、三者面談、学校生活に関する調査を実施する。気がかりな点について職員間で情報を共有し、きめ細かな指導を行う。 スクールカウンセラーも引き続き配置し、学生が相談できる機会を確保する。
学校関係者委員の意見	言及なし。				

令和4年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その2

「評価」及び「総合評価」の評定基準
 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標② 地域農業への寄与 農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。</p>	<p>総合評価 B</p>	<p>(所見) 農業生産技術コースでは、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題として、年間を通して多種多様な作物(水稲・野菜・果樹・花き・畜産)を扱うことにより、学生の栽培・飼養管理における知識・技術の習得を支援した。学生プロジェクト20課題において、地域農業の諸課題について検証・改善した。卒業生21名のうち、自営及び就職就農は12名、農業団体・農業関連企業への就職は4名、公務員は1名、その他3名、未定1名となった。 6次産業ビジネスコースでは、プロジェクト学習の中で、加工品試作、試食アンケート、改良を繰り返し、商品開発を実践している。また、体験学習、6次産業巡見、とくしまマルシェへの出店など、学外での活動を通し、地域の実践者と直接ふれあうことで、コミュニケーション力の向上、視野の広がり、学びへの刺激が得られ、これからの経営者として必須である、地域と連携することの重要性を学んだ。卒業生17名のうち、就職就農は6名、農業団体・農業関連企業への就職は7名、未定4名となった。 新型コロナウイルスの影響で様々な活動が制限される中、実施期間の短縮や規模の縮小等を行い、農業体験学習、農業・6次産業巡見、模擬会社「そらそうじゃ」の活動等を通し地域農業との連携を図った。また、日頃の農大ロビー販売、農大祭及びとくしまマルシェにおける販売活動とおして、6次産業化に積極的に取り組んだ。情報発信及び広報活動に関しては、学校生活の様子や研究成果などは農大新聞「GoGo農大」やセンターニュース、石井CATV等で紹介し、地域農業や6次産業への貢献を図るとともに、農業大学校自体の広報を行った。 以上とから「地域農業への寄与」に関する総合評価はB(概ね達成できた)とした。</p>
--	------------------------------------	--

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題
① 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成	1 栽培・飼養管理について役割分担し、日々の栽培・飼養管理を主体的に実践させ、年間を通じた体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。	コース所属学生が、実習等を通じて得た経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を、学生の80%以上が設定する。	学生自身の農家の経営課題、将来の就農計画、地域農業が抱える課題等様々なニーズに応じてプロジェクト課題を設定し、作付け計画から栽培管理にいたる一連の過程に必要な知識や技能の習得を支援した。また、センターの研究部門と連携し、より高度な技術習得に努めた。生産技術の向上につながるプロジェクト課題に取り組んだ学生は21人中21名で100%であった。	A	地域農業への寄与のために、地域の農業支援センターとの連携を深めて、プロジェクト活動の参考とする。
	2 「農大祭」や「きのべ市」等で販売する果物・野菜・花苗等の栽培方法・機能性や調理方法等について、生産現場の視察研修や実習の時間を活用して、十分な知識を習得させる。	習得した知識を、販売時のポップ等PR資料作成や卒論の記述等に活用した学生が80%以上となる。	「農大祭」等で販売する果実、野菜、花きの栽培や加工品等の生産、農業生産現場の視察研修等を授業時間を活用して実施して、技術習得に努めた。学校評価アンケートの該当項目でも83%の肯定的回答を得ることができた。 きたじまるしゅ等への出店等により、習得した知識などを実際の接客場面で生かすことができた。また、ロビーの常設販売所や農大祭等に使用するPOPや商品ラベル作成の際に生かすことができた。	A	A 普段の実習で培った知識が農大祭等の対面販売だけでなく、接客を伴わないロビーの常設販売において生かされるように工夫する。
	3 県内農業の課題解決につながる栽培・飼養技術を実証するとともに、その技術の有用性を、作目の需要や生産効率なども含めて総合的に判断する力を育成する。	農業課題解決を意識したプロジェクト課題の選択・活動を行い、その成果を外部に発信する。	学生は地域に貢献する課題解決プロジェクトに取り組み、石井CATVに2課題発信した。	A	身近な問題の課題解決を通して地域に貢献するプロジェクト活動だけでなく、更に大きな視点に立って、それぞれのプロジェクト活動の延長線上にある課題にも意識が向けられるよう指導する。
学校関係者委員の意見		・今後も教育内容に新しいことや有機農業に関することも取り入れてほしい。また、プロジェクト研究で見出した新たな視点を農業者へも発信してほしい。			

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題	
② 農作物の付加価値販売につなげるビジネスコース (6次産業を身に付けた人材の育成)	1	プロジェクト活動において、6次産業化を伴う農業ビジネスモデルを研究・実践する。	プロジェクトで「6次産業化」ビジネスモデルの研究に取り組む学生を80%以上にする。	100%の学生が、商品開発に向けた加工、コストを勘案した価格設定に取り組み、その成果を卒業論文にまとめた。	A	6次産業化に取り組み、経営感覚を加味した6次産業化プロジェクト活動をめざす。
	2	学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	学外における販売活動を通じ、市場ニーズの調査を行い、活用する学生を1・2年合わせて60%以上とする。	新型コロナウイルスの行動制限がやや緩んだことから、徳島マルシェ、徳島ヴォルティス応援祭、きたじまるしゅなどの展示即売イベントに参加し、可能な範囲で消費者ニーズを把握した。学外でのアンケート調査などは十分行うことができずプロジェクト活動などに市場調査データを活用した者はいないが、消費者とのコミュニケーションから価格やパッケージなど多くのことを学び商品開発に役立てた。	B	市場ニーズを意識したプロジェクト活動を増やす。学外での試食アンケートなどが可能になれば積極的にデータ収集を行うよう指導する。
	3	プロジェクト活動に取り組む過程で、プロジェクトマネジメント、ブレインストーミング、PDCAサイクル等の手法を習得させる。	課題解決のための手法を利用できる学生を70%以上とする。	プロジェクト活動の計画や実施の過程で、様々なアイデアを検討し、適切な結論を導き出すことができたとする学生は、成果発表から77.5%であった。	A	引き続き、適切な方法で課題解決できるよう指導する。
学校関係者委員の意見		・米粉シフォンケーキがおいしい。百姓一へアイスを出品するとのことだが、阿波踊り会館等へも出品してはどうか。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	次年度への課題	
③ 地域農業への奇与のための体制づくりと、研究成果や学生生活動に係る積極的な情報発信	1	平成30年度より稼働した六次産業化研究施設を活用し、加工品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、販売まで至った加工品を10品以上開発し、校外販売やSNSなどを通して地域に発信する。	ビスコッティ、アイスバー、紅茶スコーン、紅茶シフォンケーキ、米粉シフォンケーキ、スイートポテト、ニンジンラングドシャ、ニンジンカップケーキ、ニンジン蒸しパン、マキャロン、不知火ジャム、農大クッキー、ポテトチップスを開発し、ロビー販売、校外販売、農大祭で販売した。	A	農大ならではのヒット商品の開発をめざす。
	2	学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。 また、農大HPその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙「GoGo農大」を年間12回以上作成して公開する。 募集案内等をHPにて2週間程度で更新し、最新の情報を地域社会に発信する。 Twitterアカウントを作成し、最新の学生生活動等の情報を月1回程度で更新し、情報を発信する。	教育活動に関する広報紙を年間10回作成して、公開した。2回分も作成予定。 農大HPの更新については、微細な変更を含めると100回程度更新・修正を行い、最新の情報にその都度更新を行い、地域社会に発信を行った。 この他、Twitterアカウントを作成し、4月から学生生活動等の情報を9件更新を行った。	B	引き続き、広報紙の発行、農大HPの更新並びにTwitterの更新を行い、積極的な情報発信を行う。
	3	本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。また、高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。 広く社会人も含めて積極的な参加を募りオープンキャンパスを開催する。	学生募集説明会1回、オープンキャンパス2回、進路ガイダンス(高等学校での模擬授業を含む)16回(2月28日現在)、農業に興味を持つ高校生を対象にした「緑の学園」事業における大学紹介1回を実施した。 オープンキャンパスでは、学校施設の案内の他、農業生産技術コース、6次産業ビジネスコースに分かれ体験学習を実施。緑の学園事業では、高等学校教員との情報交換会を実施した。 県内の高等学校における進路ガイダンスでは、座学と実習が結びついたカリキュラムの特徴を紹介するとともに、模擬授業では環境にやさしい農業技術の実践等をテーマに農業技術に特化した授業を実施した。	B	引き続き、積極的に入学生の確保に努める。 高校生以下の世代にも機会をとらえてアプローチする。
学校関係者委員の意見		・今後も教育内容に新しいことや有機農業に関することも取り入れてほしい。また、プロジェクト研究で見出した新たな視点を農業者へも発信してほしい。 ・県下の高校の農業教員60名のうち30名が城西高校出身。農業生産に携わる子供を教育すると共に、彼らを教育する人材を育成することも大切な役割。将来、地域を盛り上げ守っていくのはこういった人材。農業高校、農大、徳大の有機的な連携がさらに強化できれば農業高校から中学校へ「農業で会社社長や教員を目指そう」とさらにPRできると考える。				